本を語ろう　私の一冊

小学校（低学年）の部

【和歌山県教育委員会賞】

ひまわり

和歌山大学教育学部附属小学校　一年　前田　遙

わたしはひまわりのはなが、だいすきです。がっこうへいくとちゅうのえきにも、いっぽんのせのたかいおおきなひまわりがありました。はなはわたしのかおよりもおおきくて、まいあさそれをみるのがとてもたのしみでした。きいろいおおきなはなをみると、とてもげんきになるきがしました。あのはなのなかは、いったいどうなっているのだろうかとおもいました。そうしたらおかあさんが、この「ひまわり」のほんをかってきてくれたのです。

ひまわりはたねからまずねがのびて、はもでてきます。つちのなかからめがでてきてふたばとなりほんばになります。たいようのひかりをはにいっぱいうけてえいようをつくるために、くきはたいようのほうにむきをかえるそうです。おおきくなってやがてつぼみからはなになっていくのです。

ひまわりのはなは二しゅるいのはながあつまってできています。そとがわのおおきなはながひらきおわるころ、うちがわのちいさなはながひらきはじめ、二しゅうかんくらいたつとすべてさきおわります。

うちがわのちいさなはなはやがてみどりいろになり、はなのしたのしろいぶぶんがふくらんでたねになるのです。うちがわのちいさなはなひとつひとつがたねになり、いっぽんのひまわりから二〇〇〇こいじょうのたねがとれるなんて、わたしがこのほんをよんでいちばんびっくりしたところです。

このあいだのたいふう十一ごうのあめかぜで、がっこうへいくとちゅうのえきのひまわりはたおれてしまったのか、いまはなくなっていました。「どうなっているのだろう。とてもかわいそうだな。」とおもいました。あのひまわりにもきっとたくさんのたねができていて、またらいねん、わたしが二ねんせいになったとき、おおきなはなをさかせてくれるとおもったのにとてもざんねんです。

小学校（中学年）の部

【和歌山県教育委員会賞】

命の大切さ

和歌山大学教育学部附属小学校　四年　辻井　麻友佳

私は、「しあわせのバトンタッチ」という本を読みました。この本を選んだ理由は、表紙の犬の顔がやさしそうにわらっている様に見えたからです。そして、私のいとこの家族がぎゃくたいされていた犬の里親になっているというのもあり、読んでみたいと思ったからです。

この本は、犬の未来が主人公です。未来は子犬の時、人間にぎゃくたいされ、野原に捨てられて、けいさつ署に「落とし物」として保ごされました。その後、動物愛ごセンターという場所に送られます。犬収容室の殺処分室で、二酸化炭素ガスで殺されてしまう前日、見学に来ていた山口麻里子さんによって、すくい出されます。

私がこの本を読んで、いちばん心に残ったところは、未来が、人間にぎゃくたいされていたのに、麻里子さんにしっぽをふってかけよったところです。私は、この部分を読んで「未来は、すごくかしこい犬だなぁ。」と思いました。なぜなら、子犬の時、人に右うしろ足の足首と左うしろ足の指をすべて切り取られていたのです。もし私が犬だったとしたら、そんなにいたくてこわい目にあわされたのだから「人間はてきだ！。」と思って、かみついていたでしょう。でも、しっぽをふってかけよったのです。未来はどうしても生きたかったのだと思います。それに、麻里

子さんなら、助けてくれそうな人だと感じたのかもしれません。
麻里子さんの家には、未来のような犬がすでに三頭もいます。一生のお世話するのに、一頭に三百万円もかかります。麻里子さんは、里親をさがしました。そして、この本を書いた今西乃子さんが里親になります。その後、乃子さんと未来は、色々な学校で、「命の授業」をはじめました。命の大切さを教えていきます。やさしくてかわいい未来は、どこへ行っても人気者です。
私は、この本から「やさしさ」や「命の大切さ」そして、もっと自分をすきになる事が大事だと学びました。私は、学校の先生に、クラスの「えんの下の力持ち」と言われます。少しは人の役に立っていると思うので、私も小さなバトンだけど、持っているのかもしれません。
未来は、もっと大ぜいの子供たちの役に立って、「命のバトン」をわたしています。
小さな犬だけれど、未来の持っているバトンは、すごく大きいと思います。
未来は、もう一度、人を信じてみたので、たくさんの人に愛される事になりました。
この本の表紙を見た時、未来の顔がわらっているように見えたのは、今、生きている事がとてもしあわせで、本当にわらっているのかもしれません。

【和歌山県市町村教育委員会連絡協議会賞】

ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか。

安楽川小学校　四年　岡　陸斗

新聞で、ナイジェリアの女子生徒二百人以上が学校から連れ去られる記事を読みました。犯人グループは「教育をうけるべきではない」という考え方でした。日本ではありえないことで強いしょうげきを受けました。
前に読んだ本をもう一度読むことにした。それは「ぼくたちは、なぜ学校にいくのか。」という本です。ページをめくると、マララ・ユスフザイさんの国連演説から始まります。
「銃ではなく、本とペンを。
戦場ではなく、学校を。」
マララさんは２００９年、イギリスの番組で武装グループが女子学校を破壊することを伝え、女性にも教育が必要だと訴えました。２０１２年10月、パキスタンで事件は起きます。マララさんが学校から帰る途中、銃で頭と首をうたれ、意識不明の重体になるのです。リハビリを続け奇跡的な回復をし、翌年16才の誕生日に国連で演説をしました。
演説でぼくは、「ペンは剣よりも強し」ということわざを覚えました。ペンは言葉、言葉はどんな暴力よりも大きい力を持っているという意味です。マララさんは、今も声を上げ続けています。
「武装グループは、わたしたちの言葉をおそれています。わたしはだまりません。自分の言葉の力を　強さを信じましょう。言葉は、世界を変えられるのです。」と。
言葉をうばわれそうになって、マララさんは初めて、言葉の大切さがわかりました。言葉によって自分の気持ちを表せるようにしなければならない。そのために必要なのは、学校と教育です。世界には多くの不平等があって声を出して世の中を変えていくべきなんだ。教育が世界を変える。と言っています。
毎日学校に通って勉強することは、世界の子供たちにとって、当たり前なことではないんだな。学校ってすごく大切な場所なんだなと思うようになりました。
クラスのみんなは、ぼくの言葉をよく聞いてくれます。正しければ、うなづいてくれるし、間違っていれば、教えてくれます。話し合いをしながら何かを決めることが多いです。自分の言葉で気持ちを伝える勉強

をしています。もっと勉強をして英語も話せるようになれば、世界中の人と出会い、役に立てるんじゃないかと思います。

学校には、家にないものがたくさんあります。図書室に行けば、本がたくさんあって、音楽室にはめずらしい楽器があって、体育館にはいろんな道具があります。学校で初めて見て使い方を教えてもらったことがいろいろあります。それに学校に行かないと友達もいません。学校に通って勉強ができる生活は幸せなことなんだと思えるようになりました。

学校で、新しいことを学んだり、友達と話したりして、自分の言葉で気持ちを伝えることをもっと身につけていきたいと思います。

【奨　励　賞】

手足なしの先生

宮小学校　四年　隠　岐　日　陽

ぼくは、「だいじょうぶ3組」という本を読みました。そこに出てくる赤尾先生は、手も足もありません。心で生徒達に色んな事を教えます。ぼくは、初め手も足もない人が先生なんてできるのか、と思いました。

ある日、幸二と聡子の上ばきがなくなっていました。先生は、手も足もないので上ばきを探すことができないことをあやまりました。そして、上ばきをかくした子に何か理由があるけどなぜこんなことをしたのか、今何に苦しんでいるのかわからないことをあやまりました。その後かくした子は、先生の言葉に目がさめて上ばきを返しました。次の日から文乃が学校を休み始めました。話を聞くと、文乃のお姉ちゃんはダウン症で、動物園で象のまねをずっとしていて、まわりの人に大笑いされました。文乃はとても悔しくてお姉ちゃんと一緒にいるのが苦しくなり、さらに新しい先生が障害者でそれを見るのがもっと苦しくなってしまいました。先生はふつうって何という授業をしました。それは、文乃の心を動かしました。ふつうというのはみんなが同じということなのか、みんなとちがうから変なのか、一人だけだからダメなのかという授業でした。文乃は、お姉ちゃんのことを自分もふつうじゃない、と思っていたと気がつきあやまりました。みんなとちがっていても私の大事なお姉ちゃんと思ったのです。

ぼくは、文乃の気持ちが少しわかります。ぼくにはお兄ちゃんがいます。リンパ管腫というあごの下にたく山のリンパ液がたまる病気を持っています。ぼくも、その治りょうについて行ったことがあります。まず、シャーペンのしんよりも太い針をあごの下にさします。その後、リンパ液をぬいてお薬を入れます。針をさしたときのお兄ちゃんは苦しい表じょうで、ぼくはやめてほしいと思いました。お父さんは、それを見てひん血を起こしてしまったことがあります。お母さんにくわしい話を聞くと、もっと小さいころは動くとあぶないので毛布にぐるぐるまきにされて、治りょうをがんばっていたそうです。治りょうの後は、あごがすごくはれて顔がゆがみます。もし、お兄ちゃんが学校で笑われていたとしたら、ぼくはとても悔しいと思うと思います。なぜなら、治りょうもがんばっていたのだし、好きでそんな体になったのじゃないのだからです。

今まで、障害者はできないことがいっぱいあるから、助けてあげようと思っていました。でも、この本を読んで赤尾先生が文乃を助けたように、手足がなくても心と言葉で助けることができる、とわかりました。同じ人間だということです。だから、自分のできることを見つけて、おたがい助け合って生きていくのが大切だと感じました。

「ただいま！マラング村」を読んで

和歌山大学教育学部附属小学校　三年　森　晴　紀

「えっ、本当にこんな子がいるの。こんなお話、ありえないよ。」ぼくは、すごいおどろきで、この本を読みながら、なんとも信じることがで

きませんでした。ぼくにはぜったい考えられないことだからです。
おばさん家でくらしていた4才のツソはお兄ちゃんといっしょに家をとびだします。
だけど、村から町へ出たあと、と中で、お兄ちゃんとはぐれて一人ぼっちになってしまいます。それから何年間もひとり一人生きていかなければなりませんでした。お金も、家もなかったので、道ばたでねて、お店の食べ物を、ぬすむことがむずかしい時は、ごみをあさって食べてくらしていました。
4才の時は、ぼくは、ようちえん、年少組。もし、ぼくが家ぞくみんなとはなれて、知らない場所で一人になってしまったら、こわくて、かなしくて、ずっとそこにいて、ずっと大声で泣きさけんでいるだろう。こんなつらいこと、そうぞうしたくないけど、でも、お父さん、お母さんは、ぼくをきっと見つけに来てくれる、もしかしたら、しんせつな人がぼくをたすけてくれるかもしれないと思います。でも、この本の中には、信じられないけど、ツソのように、道ばたでくらしている子どもたちがたくさんいます。だれも大人の人たちはたすけてくれないのです。ツソは、お兄ちゃんを見つけるために、いろんな町に行ってくらします。なかまができたり、けんかもしたりいろんなできごとがあって、毎日を生きていきます。でもツソは、本当に幸せでした。シスターやユッタ・ママに出会えて、きしゅくしゃでべんきょうをすることができるようになったのです。二人に初めて出会った時のツソの気持ちが本の中に書かれています。「そのときぎゅうに、ツソの体のおくから、なにかがこみあげてきた。ちょっとうれしいような、ちょっとさびしいような、あまずっぱくてなんだかもやもやしたものだ。」「とても小さかったときに、こんなかんじがしたような気がする。」ツソは、お父さんもお母さんもお兄ちゃんもいて、みんなでいっしょにくらしていたころのこと、楽しかったこと、しあわせだったこと、わすれてしまっていた家ぞくのあたたかさを二人と出会ったしゅん間に、思いだしたんだなと思って、うれしくなりました。かれかけたお花に、水をあげたら元気になっていくようなかんじにいると、思います。ツソはシスターのき宿舎でべんきょうができるよろこびで、一生けんめいべんきょうしました。ツソが住むアフリカのタンザニアはぼくらの日本からとおいので知らないことがたくさんあります。ツソは今、二十才をすぎたころかな。ツソは思いやりのあるかしこい人だから、一人でも多く、つらい生活をしている子どもたちをすくってあげてほしいです。ぼくも、今勉強が楽しいよ。ツソのことわすれないよ。しょう来、人のやくにたてるようにがんばるよ。

小学校（高学年）の部

【和歌山県教育委員会賞】

生きつづけるアインシュタイン
～アインシュタインと相対性理論を読んで～

山崎小学校　五年　前田千歩

私は、宇宙が大好き。それで、今年の2月、和歌山大学宇宙教育研究所主催の、「コズミックカレッジ」に行った。パラボラアンテナを使って、人工衛星の信号を受信したり、衛星画像を組み合わせる、加工の方法、衛星について学んだ。さらに興味がわいたので、本を読んだり、科学番組を見たりしていた。そのうち、現在の宇宙モデルの元を考えだしたのが、アインシュタインだと分かり、その一生と相対性理論について、大きな魅力を感じた。図書館で、アインシュタインに関する本を見つけて、読むことにした。
アインシュタインの名を知らない大人はいないだろう。なぜなら、実に偉大で、すばらしい思考能力の持ち主だからだ。アインシュタインは、相対性理論により、時間と空間の常識をくつがえし、現在の宇宙モデルを考え出したのだ。時間が速度や重力により、ゆっくり進むなんて、空間は質量により曲げられ、それにそって光が進むなんて、私にはその疑

問すら出てこない。でも、アインシュタインは、その問題に取り組み、たくさんの時空に関する難問といっしょに、相対性理論としてまとめたのだ。相対性理論は、アインシュタインにしかできない事だったと思い、何度も何度も夢中で読み返した。

しかし、アインシュタインの有名な式、$E=mc^2$は、アメリカの原子爆弾開発のヒントになってしまった。そして、広島と長崎で、たくさんの人の命をうばい、もっとたくさんの人を苦しめた。さらに、原子力発電では、福島原子力発電所で、津波による事故が起こり、まだたくさんの人が避難生活をよぎなくされている。アインシュタインの式は、アインシュタインにとって、答えであり、次の学者へのバトンでもあったはずだ。それを、たくさんの人の命をうばうための兵器として使われるのは、とても悲しいことだと、心の底から思った。アインシュタインは、原子爆弾を兵器として使わないように、活動を始めた。平和のために立ち上がったのだ。けれども、多くの人がアインシュタインを年寄りだといって、あまり共感しなかった。だが、アインシュタインはあきらめず、活動を続けた。私は、びっくりするほどたくさんの人に非難されても、とまどうことなく活動を続けるのは、苦しかったのだろうと心が痛んだ。

科学技術は私たちの生活をより便利なものにしてくれる。しかし、一歩まちがえれば、たくさんの人の命をうばい、苦しめる道具になってしまう。技術の使い方を確認すれば、それをふせげると思う。

「想像力は知識よりも重要である。知識にはかぎりがあるが、想像力は世界を包み込む。」これは、アインシュタインの言葉だ。私は、想像力を使って、何事にも真剣に取り組んで、小さくてもいいから、一つ発見をしてみたい。

【和歌山県市町村教育委員会連絡協議会賞】

「カブトムシ山に帰る」を読んで

和歌山大学教育学部附属小学校　五年　西　川　亜緒衣

私は「カブトムシ山に帰る」という本を読みました。この本を選んだのは、この本の表紙のカブトムシの写真がかっこよかったのと、題名に興味をもったからです。カブトムシはもともと山に住んでいるものなのに、どうして「帰る」という表現なのかなぁと不思議に思ったからです。

この本は、カブトムシと、こん虫カメラマンの山口進さんという人が主人公の物語です。ある日、カブトムシが小型化していることに気付いた山口さんは、虫がくらすかんきょうの変化がカブトムシの小型化につながっているのではないかと考えます。森があふれて虫はいなくなり、カブトムシが小さくなる。山口さんはあれた森を手入れして再生させる活動を始めます。

私は山口さんが、カブトムシのために林を手入れして、住めるようにする活動を続けたのはすごい力だなぁと思いました。

本を読み進めると私が最初題名を見て気になっていた「カブトムシ山に帰る」の「帰る」というのは、山のおく深く、おく山で生活していたカブトムシが山の周辺に人が住むようになって林がきれいに保たれ、里山で苦労せずに豊かな栄養をとることができるようになったカブトムシが、その里山がなくなってきて、生活がしにくくなり、あれたおく山が山口さんたちの手によって復活しているおかげで、もともと住んでいた山に「帰る」ことが出来たという意味なんだとわかりました。

山口さんは本の中で「人と自然が助け合う世界」が大切だと書いています。私はこの文を読んで改めて「自然」は大切だと思いました。食べ物や水、電気、ガスなどは全部自然の力がないと作り出せません。だから建物をつくるために木を切りたおしたりすると、私たち人間が生きていくために必要なものを失うことにつながります。自然を大切にすると

いうことは、私たち人間やカブトムシだけでなく地球に住んでいるすべての生き物が住みやすくなるということにつながっていると思います。

大気汚染や地球温暖化、原発による放射能など目に見えなくておそろしいものがたくさんあります。これからも私たちが便利を求めて自然を変えてきたことがもともとの原因です。今から昔のような生活はできないけれど、山口さんがカブトムシを通して自然を守る活動を続けているように、私にも小さな事から自然を大切にする取り組みができると思います。今私の家で家族がしているのは電気の節約やゴミの分別です。これをもっと広げて大きな力になればいいなぁと思います。

私は、これからもっと自然を大切にする意識を持とうと思います。

【奨　励　賞】

かあちゃん取扱説明書

宮原小学校　五年　中　山　結　夢

実におもしろい本がある。それだけでなく、自分の家族をもっと好きになる本だ。

主人公の哲哉は「ぼくのかあちゃん」という作文を書いた。「ぼくんちで一番いばっているのはかあちゃんです。」という書き出しから始まり、朝からガミガミうるさいこと、かあちゃんはケチなこと、「おいしい」とほめたごはんは何日も続くこと、すぐ「早く」ということなどが書かれている。かあちゃんの悪口をあれこれならべたてた作文なのに、どういうわけか先生から返してもらった作文には、トクダイの花丸。その作文を読んだお父さんが、

「あっははは、こりゃあいい。」

と大笑い。かあちゃんに言ったりしないという男同士の約束をかわし、

「かあちゃんのあつかいは、なれたもんさ。かあちゃんは、ほめるときげんがよくなるんだ。とにかくほめること。パソコンもビデオも、あつかい方をまちがえると動かないだろ。」

と、哲哉のお父さん。

―そうか、あつかい方だ。そう言えば、私のお父さんも時々お母さんを連れてケーキを買いに行くことがある。そんな時だいたいお母さんは、つかれてきげんが悪かったり、体調が悪かったりする。ケーキを食べたお母さんは元通りの元気なお母さんになっているものだ。哲哉だって考えた。かあちゃんのあつかい方をマスターしたら、おこづかいだって、おやつだって、ゲームだって、ぼくの思い通りになるかもしれないと。そこで考えたのが、かあちゃん取扱説明書、略してトリセツ。ノートに手と足をつけた雪だるまを大きく書いて、各種機能を書き入れる。例えばこんな感じ。「うで↓買い物ではかいりきパワーを見せる。両手いっぱいのにもつをかるがるはこぶ。」や「手↓料理やさいほうとかをする。」といった具合だ。私のお母さんも同じだと思わず笑ってしまった。その他、宿題を手伝ってくれる「便利機能」や、「食べたいごはんを作ってもらう方法」「勉強勉強と言わせない方法」なども書かれている。「ねぼうしたときにおこられない方法」にはちょっと笑ってしまう。基本編としてあわてていることをアピールすると良いそうだ。シャツの表うらをまちがえたり、くつ下の右左をまちがえたりわざとする。そしてよけいなことは言わないでとにかくダッシュ。すると、哲哉のかあちゃんはおこりもせずふき出した。大成功。トリセツってすごいな。私なら「ねぼうした時おこられない方法」のトリセツはなんといってもいいわけせず、ひたすら朝食を食べる。五分で食べると効果あり。哲哉のトリセツに合わせて私も自分のお母さんのことを考えていて気付いたんだ。私はきっとお母さんの頭の中のトリセツで育ってきた。お母さんこそが私達の取扱名人。かあちゃん大好き、ありがとう。

「思いやりと勇気」

和歌山大学教育学部附属小学校　六年　堤　瑞

いつからだろう。一年生の頃はできていたのに。「ふたり」を読み始めてぼくは思った。

ある日の放課後、転校生の佳純の机に女の子達が汚い雑巾を詰め込んだ。それを見た准は帰り道、友達のさそいを断って教室に戻る。あの雑巾を取り出すためだった。

ぼくは、その場で「やめなよ」と言えなかった准の気持ちがよく分かる。准は、みんなにからかわれる気がして勇気が出なかったんだと思う。それでも、こっそり雑巾を取り出しにきた。あっもしかして、いやがらせをされたと知った佳純が悲しむと思ったから、言わなかったのかもしれない。

准が雑巾を取り出していると、佳純が教室に戻ってきた。事情を説明して「ごめんね」と頭を下げた准のランドセルから一冊の本が落ちた。それは佳純が好きな作家の本だった。その作家がふく面作家で全く違うジャンルの本を書いていると知った二人は、その本を探すため、週に一度図書館で一緒に過ごすようになる。そこからの物語は、少しミステリーな感じでワクワクした。ぼくも二人と一緒にふく面作家を探した。

二人で過ごしているといろんなことがあった。准は、佳純のお母さんは耳が不自由だと知って指文字を覚える。そして、いやがらせをされた佳純を指文字ではげました。佳純はお母さんとり婚したお父さんが新しい家族をつくっているのを知り悲しむ准に、ずっと付きそった。ぼくは、ふく面作家探しにワクワクしながらも、お互いを思いやる気持ちが強くなっていくのを感じて、二人の間の空気に、なぜかドキドキした。

そんな時、事件は起きた。准が毎週女の子と過ごしていることが、じゅくの友達を通してクラスのみんなにばれた。数日後には、その女の子が佳純だということもばれてしまう。クラスは大さわぎになり、冷やかされるようになった。それでも二人は変わらなかった。冷やかしはひどくなる一方だ。准は、とうとう叫んだ。

「こんなことして何が楽しいんだ！」

その一言でクラスは変わっていく。

ぼくは、女の子と下校するのでよく友達に冷やかされる。その時ぼくは、すぐに言い返せることが出来る。でも、女の子がいやがらせされている時には何もできない。三年生の頃までは止めることができたのに、いつからかできなくなった。なぜだろう。この本を読んでぼくは考えた。今は止めようとするとからかわれるからだ。准は、心のこもった一言でクラスを変えた。ぼくにもできるはずだ。でも、今のぼくには勇気がない。いつかその勇気を持てるといいな。持ちたいな。

あ、そうだ。ふく面作家についてのぼくの推理は外れていた。

中学校の部

【和歌山県教育委員会賞】

そこにいなければならない意味

向陽中学校　一年　吉岡　萌

あなたは、あなたがそこにいなければならない意味を考えたことがあるだろうか。例えば、今あなたが所属しているグループなどという具合に。あなたの立場や、存在する意味は、そこにあるだろうか。

この本の主人公である沖田慶吾は5歳のとき、母に捨てられ、施設で育った。自分を捨てた母をうらんで、愛にうえて、それでもなぜか母が生きるかてとした囲碁をはじめる。母と暮らしていたとき、碁石に触ろうとすると頬をぶたれた。でも、施設には母はいない。毎日碁盤の前に座り、相内園長と打つ。

そして、高校生になると、慶吾は囲碁部に入部する。唯一の友達は後

輩の香田純隆。香田は慶吾の与えた試練を次々にクリアし、慶吾の心の扉をこじ開けていく。

慶吾は囲碁を打っているとき、相内園長にこう教えられる。

「碁石は置き直すことはできない。だから、この石がそこにいる意味を持たせてあげなくてはならないのだよ。」

私は、ただの碁石だと思っていたものにも、ちゃんと意味があって、そしてその場所にいなければならない理由もあることに感動した。私達は意味のない物に生きる意味を与えることができる力を持っているのに、なぜ人間同士では生きる意味をなくすような言葉や行動をしてしまうのだろうと疑問に思った。

慶吾は自分が生きている意味を常に考えていた。でも、考えても見つけることは難しかった。考えるたび、妨げるように母が出て行った日を思い出す。自分から行動をおこす勇気がない慶吾は、香田に押されてやっと、母が自分を置いて出て行った理由をつきとめようと思った。多分、慶吾がなかなか行動をおこせないのには理由があるのだと思う。それは、母の帰りをずっと家で待っていたら、母は帰ってきてくれて、また別の暮らしがあったかもしれないからだ。自分が母の帰りを我まんできずに家を出てしまったから、こんな事を考える日々を送らなければいけなくなったのだと。自分が動くと、過去の様に何かを失ってしまうのがこわいのだと思う。

私は慶吾が持っているトラウマは本当に悲しいと思った。自分から行動することができない。私が慶吾の立場だったら、どうなるのだろう。多分、私はじっとただ何かを待っているだけかもしれない。苦しいも何もいわずに助けを待っていると思う。

慶吾の友人、香田は慶吾とは全く正反対で、二人の関係にひびが入りはじめたときにも、香田が先に行動し、穴をうめにいこうとした。

私は、香田の行動にびっくりした。一度は本当に友の縁が切れそうなほど仲が悪かったのに、香田は慶吾を失いたくなくて、家の前で待ちぶせし、関係を修復しにきたのだ。香田の優しさに感動した。そこでやっと慶吾は自分がそこにいる意味を見つけたのだと思う。意味もなく毎日コーラを買い続け、香田を待ち続けた慶吾は、無望だとしかいいようがない関係でも、希望を少しでも持っていたのかもしれない。

最後に、慶吾は母に囲碁を打つ。そして、母にたずねた。

「あなたは今、幸せですか」

私はこの言葉で涙が出た。母は今幸せだと答えた。慶吾はこの言葉を最後に母と子の関係をようやく切ったのだった。

慶吾には生きる意味、そしてそこにいなければならない理由は、香田との仲だと思う。お互いに友達として支え合い、認め合っている。私にもそんな友達がいる。

私には、今、必要としている人がいる。それは、私を必要としてくれる人がいるからである。誰かのために何かをしてあげることができるのなら、そこにいる意味は必ずあると私は思う。誰かのために何かを思うことができるのなら、そこにいなければならない理由があると思う。

自分を見失い、自分がここにいなければならない意味がわからなくなったとき、この本を開いてみてはどうだろう。きっとあなたは何か前に進める勇気を持ち、あなたが生きる意味を見つけることができるはずだ。

【和歌山県市町村教育委員会連絡協議会賞】

「くちびるに歌を」を読んで

第三中学校　二年　井上　海凪

この本は五島列島、長崎県の西の海に密集する百四十もの島のうちの比較的大きな一つの島が舞台です。そこにＮＨＫ全国合唱コンクールを目指す中学校があります。合唱部は女子ばかりの部。そこに産休を取った先生の代わりに赴任してきた美人の合唱部の顧問の柏木先生や柏木先生目当てに入部してきた男子部員、そして純粋に合唱を愛する女子部員

と真面目に取り組まない男子部員。そんな合唱部に成り行きで入ってしまったのがこの物語の主人公の一人「ぼっち一級」のサトル。ぼっちとは特別周囲には嫌われている訳ではないけれど周りとのコミュニケーションを取らずいつも一人ぼっちでいる人の事です。家庭の複雑な事情から自ら、そんなぼっちな生き方をしているサトル。その複雑な家庭の事情というのがサトルの兄が障害者であるということ、そしてその兄の面倒をみる為に自分が生まれてきて存在していると思っていることです。だからサトルはなにも望まない。将来は親戚が経営しているかまぼこ工場で兄弟揃って働き、兄の面倒をみていくのが自分の存在意義だと思っているから。

今まで僕は自分が自由に生きていると思ったことは一度もありませんでした。毎日、学校や塾の勉強があり、その上、週末には水泳の早朝練習。起きるのが辛くて休みたいといつもいつも思います。その上、両親が仕事で忙しい時は弟の面倒をみなければいけない。僕の家は自営業だけど両親は後を継げとは言いません。自分のしたいことをすればいいと言われます。決められた未来なんか一つもない、真っ白な未来にいろんな夢が描ける。これが、自由なんだと初めて感じました。自分の将来を自由に描けないサトルはなにも望まずに障害者の兄を受け入れてきました。けれど、そんなサトルが合唱部に入部してみんなと声を合わせる喜びを感じます。僕は意外に思いましたが、みんなと歌を歌っている瞬間だけなにもかも忘れられる気がしたのかもしれません。

それまで不真面目だった男子部員達もサトルの指導を受けて練習を始めます。そして、合唱コンクールの日を迎えます。課題曲は、「手紙～拝啓十五の君へ」この課題曲に決まった時、顧問の柏木先生が出した宿題が十五年後の自分宛に手紙を書くことでした。サトルが書いた十五年後の自分に宛てた手紙は、とても感動的で、こんな苦しみや悲しみを抱えて生きてきたのかと思うと胸が締め付けられる思いがしました。

そして、コンクールの間、皆の邪魔をしてはいけないからとホールの外で待っていたサトルの兄の為に、合唱部の女子部員がサトルの兄に歌を歌おうと提案します。そして他の中学校の生徒達も参加しての大合唱になりました。

自分の居場所や仲間ができて、ぼっちではなくなったかもしれないけれど、将来自分がするべきことを理解しているサトルの事を思うと、皆がサトルの兄の為に歌を歌う場面に救われた気がしました。サトルの家族のように障害者に対して理解がなく辛い思いをしている人が確かにいるのかも知れません。けれど、障害を持つ人に対して優しく思いやれるのは家族だけではないと思います。上辺だけの優しさじゃなく、本当の心で接してくれる人がきっといると思います。人を拒絶する人間じゃなく人を受け入れられる人に僕もなりたいと思いました。

【奨　励　賞】

「現実」の探求

伏虎中学校　三年　石　原　佳　奈

『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』とは、フィリップ・K・ディック著の長編小説である。そして私の初めて読んだ海外作家の作品であり、SFに興味をもつきっかけになった一冊だ。

ネットでその名前を知り、近くの書店で即購入。買った理由は「名前が格好良いから」なんて幼稚なものだったが、あの時買っておいて良かったと今は思う。

第三次大戦後、放射能灰に汚された地球では、生きている動物を所有することが地位の象徴となっていた。人工の電気羊しかもっていないリックは、本物の動物を手に入れるため、火星から逃亡してきた〈奴隷〉アンドロイド八人の首にかけられた莫大な懸賞金を狙って、決死の狩りを始める。

これがこの話の大まかなあらすじだ。

火星に人間が住めるという設定は、SF小説ではよく見かける。移住

する理由はどの作品も様々だが、もしも現実で火星に住めるのならば、「地球に住み難くなった」からというのは嫌だなと思う。他の生物と共存してこそ人類だ。

この小説の主人公リック・デッカードは、バウンティ・ハンターという特殊な職業に就いている。火星から逃げてきたアンドロイドを始末するという仕事だ。非人道的に見えるが、警察が雇っている正統な職らしい。見た目は人間とそっくりなアンドロイドを殺し、かせいだお金で動物を手に入れる。滑稽だと私は思った。今の私たちの生活と真逆に感じたからだ。

私がこの世界にいたのなら、人の少なくなった寂しい地球には住まず、さっさと火星に移住している。

しかし、火星に行きたくても行けない人々の姿もあった。放射能灰に侵されてしまった人たちだ。

その一人であるJ・R・イジドアも、この物語の大事な登場人物だ。リックが中心の章、イジドアが中心の章、という風に話が展開されていくからである。

「ピンボケ」といわれ、放射能にやられても仕事をがんばるイジドアの姿に良い印象を受けた。

現代の世の中にも病気を抱え、つらくてもがんばっている人たちがいる。それはとても大変で、素晴らしいことなのだと再認識させられた。

さて、この作品を書いた作者はこう思っている。体が機械だからアンドロイドなのではない。人とアンドロイドを分けるのは感情移入度だと。

つまり、「感情移入」は人間の大きな特徴なのだ。作者はそれをテーマにし、この小説を書いたのだといえる。

感情移入度を調べるテストで人かどうかを区別し、アンドロイドだけを始末してきたリック。しかし、いかにも見た目と言動が人間らしい彼らの死を目の当たりにして、冷静だったリックも疑問をもち始める。

「自分は本当に人間なのだろうか」と。

誰だって混乱してくる状況だ。私も彼と同じ境遇ならそう考えてしまうかもしれない。

「現実」の探求。それもこの作品のテーマの一つだ。自分が何者かをつきとめることで主人公は成長し、困難を乗り越える。

タイトルの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』もそうである。ただ長くて幻想的なだけではない。このタイトルには作中でリックが抱く疑問、不安が表現されているのである。

SFであると同時に哲学的なこの物語は、もちろん学生である私には難しい。

何度読んでも全てを理解することはできずに、新たな考えや発見が浮かぶ。

私は最初に読んだ時、SF的な設定や世界観に圧倒された。でも今は違う。

作品を通して作者が言いたいこと、伝えたいことは何なのか。それを読み取るために、この本をもう一度開いている。

作者の考えが理解できれば更に面白く読めるだろうし、考え方の世界が広がるだろう。

どうやら私はSFの扉と一緒に、哲学の扉も開けてしまったらしい。不思議と色々考えさせられる『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』という物語。その質問の答えは、いつか見つかるのだろうか。

「本屋さんのダイアナ」を読んで

那賀中学校　二年　阪中　菜々子

「リュークス、リュークス、フィルフィルー。なんびとたりとも、この神崎彩子を縛ることはできない。私に命令できるのは、この世界で私ひとりだけ…」

彩子がこの呪文をつぶやいた時、彩子はすごく強い女性だ、と私は思いました。彩子だけではなく、この本に出てくる女性はみんな強くてた

くましくて、読んでいて勇気をもらいました。

「本屋さんのダイアナ」は、ダイアナと彩子、二人の少女の成長の物語です。二人はとても対照的でお互いがお互いに憧れ合っています。ダイアナは、「大穴」という変てこな名前のせいで周囲からいじめられ孤立してしまいますが、最終的には自らの力で道を切り開いていきます。

私は、正直にいうと自分のことがあまり好きではありません。「私ってなんでこんなだめな人間なんだろう。」と思うことはよくありますし、それに人と話をすること、話しかけることも苦手に、友達との会話があまりできません。そんな自分を変えたいとも思うけど、それは一瞬のことです。「これが私なんだ。」「これでいいんだ。」と都合のいいことを考えていました。変化するのを怖がっていたのかもしれません。

しかし、この本の

「私に命令できるのは、この世界で私ひとりだけ…」

という文を読んで、ああ、なるほど、と思いました。誰かに言われるのでなく、誰かが助けてくれるのでもなく、自分は自分のものなんだと感じました。私でなければ、私は変えられない、自分ともっとしっかり向き合ってみようと考えた、お気に入りの文です。

物語の中で、ダイアナと彩子はそれぞれにかかっている呪いを自力で解いていきます。その姿がかっこよくてきらきらしていて、読んでいるうちに二人のとりこになってしまいました。また、そんな二人を取り囲む人々も、とても個性的でおもしろいです。特に私が好きなのは、ダイアナの母、ティアラです。ちゃらちゃらしているように見えて実は娘の事をとても大切に思っているところや、女手一つで娘を育てたたくましいところに、何度かうるっとしました。ティアラもまた、とても強いしっかりした女性だなと感じました。

この本のヒロイン、ダイアナと彩子は大の読書好きです。私も本が好きなので、二人に共感しながら読むことができました。また、「本屋さんのダイアナ」には、二人の愛読書の名も多数出てきていたので、わくわくしながら読んでいました。知っている作家、本の名前が出たときはとても嬉しかったです。知らない本がとてもたくさん出ていたので、一度また読んでみよう、と思いました。

「本屋さんのダイアナ」を読んで、私はいろんな事を考えました。悩み迷いながらも自分で道を切り開き、力強く進んでいくダイアナや彩子のような女性になりたいと感じました。そのためにまず、自分をしっかりと見つめてみようと思います。

「リュークス、リュークス、フィルフィルー。なんびとたりとも、この阪中菜々子を縛ることはできない。私に命令できるのは、この世界で私ひとりだけ…」

きみの友だち

那賀中学校　二年　山田和実

私が苦手なものは友だちです。正確には友だち付き合いが苦手です。だからなのか、友だちがテーマの本を読んで

「ものすごく感動した。」

という経験はあまりないです。でもこの本は違ってものすごく感動しました。だからこの本を読んで思ったことを正直に書きたいと思います。

私は、自分と四つ目の話の主人公、掘田ちゃんは似ているな、と感じました。クラスでの立ち位置は全然違うけれど、いろんな友だちグループをふらふらしているところとか、周りに必要以上に気を使うところとか、裏でいろいろな感情を抱えているところなど、掘田ちゃんとはいろいろな部分が自分と重なりました。だから掘田ちゃんの辛さは少なからず分かるし、共感しました。

でも少し、羨ましいな、とも思いました。掘田ちゃんは周りに悪口を言われてもそれを知ってくれた人が居たし、最終的にはクラスの中心に戻れたのですから。そこが私と掘田ちゃんとの違うところです。私の場合は完全に逆だったから、掘田ちゃんが羨ましいし、周りの環境も

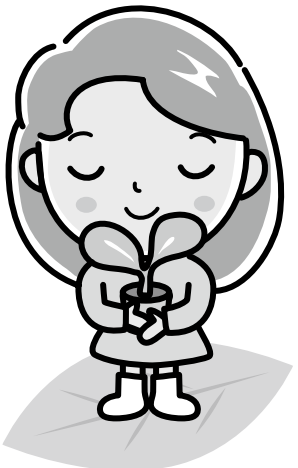
すごいな、と思います。
　掘田ちゃんの他にも、恵美ちゃんやブン、モトくん、その他いろいろな人が主人公として登場しますが、全員が各々の壁や障害を乗りこえていて、
「強いなぁ。」
とすごく感心しました。またどの人物も自分自身が分かってて、活き活きしているのが文章から伝わってきました。
　やはり、重松清さんはすごいな、と思いました。重松清さんの作品を読むのはこれが初めてだと思うんですが、表現の仕方にすごくおどろきました。さっきも書いたように、人物が活き活きしているのが文章からよく分かるし、なにより主人公の表し方を「きみ」としていることには本当にびっくりしました。この表現をしている為か、各主人公に対してものすごく感情移入してしまいました。
　そしてもう一つ、この本を読んで思ったことがあります。
　この話はノンフィクションなのですが、ドキュメンタリーっぽくなく、一つの物語として読めました。それに、昔よく読んだ本のような感じでも綺麗事とかではなくて、ごく自然な真実、というような印象を受けました。
　これらがあったから感動したんだな、と改めて思うし、この本の特徴であり魅力なのかな、とも思いました。
「いちばん大切なもの。」家族とか命とか平和とかたくさんあると思います。でもやっぱりいちばん大切なものは友だちなんじゃないか、と。というのも、一生一緒に居て助けてくれるのは友達だからです。たくさんの思い出や同じ時代や時間を共有できるのも友だちだけじゃないのかな、と私は思います。この本を読むと一層そう思います。だから苦手な友達付き合いを頑張ります。掘田ちゃん達のようにはいかなくても彼女達に近付けるように。いちばん大切なものとたくさんの思い出をつくるために、頑張ります。
　私はきみの友だちになれるかな、きみのいちばん大切なものに仲間入りできるかな。分からないけど頑張るよ、この本を読んでそう思ったから。
　私にそう思わせてくれてありがとう。掘田ちゃん、恵美ちゃん、ブン…この本に出てきた人達みんなみたいになりたいな。

自分らしさ

石垣中学校　三年　河村優弥

　主人公の信行は、中学生の頃に読んだ本が忘れられずにインターネットでその本について調べていた。そんな時に偶然見つかったのがブログ「レインツリーの国」だ。ブログにあった本の感想に興味を持った信行は、そのブログの管理者だったひとみにメールを送った。それから二人のメールでのやりとりが始まった。ぼくは、
「よくある恋愛小説っぽいな。」
と思っていた。
　二人はすぐに仲がよくなり、会うことになった。その時、ひとみが隠していたことが分かる。ひとみは難聴者だったのだ。その事に気付いた僕は、ひとみの不自然だった所を理解できた。
　信行がひとみと会っただけでは気付かなかったように難聴者と健全者は区別がつきにくい。障害には、僕たちから見えるものと見えないものがある。車椅子に乗っている人、盲目者用の杖を使っている人は見ただけで「障害者」だということはすぐに分かる。しかし、難聴というのは特に健全者と見分けが付きにくい。それだけに
「本当は聞こえてるんじゃないの。」
「何で無視するの。」
といった勘違いが多いのだ。ひとみも会社の同僚からそういったイジメがつらいと信行に悩みを相談している。
　でも、ひとみは信行に
「一日だけだったらバレないと思って…。」

と言ったように障害のことを隠している。そんなひとみに信行は、
「障害は恥じゃないんだ。隠さずにみんなに分かってもらえばいい。」
と言葉をかけた。
「そんなことは多くの人に言われた。それでも私にとっては恥でしかないの。」
僕は驚いた。信行のかけた言葉はひとみのことをよく考えていて、良い言葉だと思っていたからだ。この本は、障害について改めて考えるいいキッカケになった。
今の世の中、障害者に対する公共的なサービスはとても充実していると思う。テレビの字幕、テロップや点字ブロックなど。しかし僕たちは障害に対する理解はどうなのか、盲目の人の助けになっている点字ブロックの上に自転車や障害物を置いたりしているという事実がある。障害者に必要なのは、公共的なサービスだけでなく人の助けと理解なのだと考えた。そうだとすると、僕たちはまだまだ理解できていない部分がたくさんあるのだ。
ひとみは、自分のことを理解してくれない世の中で嫌な思いや傷ついたのだ。だから信行にも隠そうとしたのだ。
信行はひとみの心の氷を溶かそうと必死に努力した。これはひとみを思う信行の強さだと感じた。
ひとみはそんな信行に
「どうせあなたには本当の私の苦労なんて分からない。」
とキツい言葉をかけた。それだけ大変な苦労をしていたのだろう。しかし信行は
「そうやって自分しか世界で傷ついたことがないみたいなこと言うなや。」
僕はまた驚いた。たしかにひとみは自分のことしか頭になく、他人のことなど考えられていなかったのかもしれない。でもひとみは自分がなりたくてなった訳でもないのに、腹が立ったと思う。信行がひとみにあんなことが言えたのは、自分も傷ついた経験があったからだろう。
信行の父は、脳の手術をした時に家族の中で唯一信行のことだけ忘れてしまったのだ。このことをひとみに話している信行の姿が僕には想像できたような気がした。この場面は心に残っている場面の一つだ。信行はひとみに、自分だけが傷ついて苦しんでいるのではないことを分かって欲しかったのだ。
作者はこの本を通して「自分らしさ」を主張することの大切さを知ってほしいのではないのかと考える。自分の抱えている荷物を、周りの人に知ってもらうこと、自分から理解してもらおうと努力することで荷物が軽くなるのだ。ひとみも信行の提案からあえて補聴器を見せるようにしたのだ。そうすることで
「心が軽くなったみたい。」
と言っている。
自分らしさを主張するというのは障害者だけでなく誰にでも言えることだ。そうすることで新しい生き方ができたり、新しい自分を見つけることができると思う。



高等学校の部

【奨励賞】

「生命の奇跡―そして人類は―」

粉河高等学校　一年　狭間　日奈子

「生命とは何だろう」「生きる命」とは、一体何なのか。

私がこの本に興味をひかれたのは生物が好きだからだ。身の周りだけでなく、深海や山や砂漠といった、自分達人間を含め、この地球には様々な環境で暮らしている生物がいる。それを思い返すと改めてこの星の威力に圧倒される。こんなに多くの生物が地球という場所でそれぞれの環境に対応しながら共存しているのは素晴らしいことだと思う。

「生命38億年」、そんな想像もつかないような時代を逆上りたどり着いた世界で何が起こり、現在にまで至る生物の姿があるのか、実際読んでみるととても深く考えさせられた一冊だった。その中でも、特におもしろいと感じたのが「進化の歴史」と「生物の多様化」という2つの課題についてだ。まず、「進化の歴史」で衝撃を受けたのが、生物の進化をダーウィンよりも早く主張した人がいたことだった。ジャン＝バティスト・ラマルクというその博物学者は、本によると生物の獲得形質は継承されるという進化論を提唱した人物である。最終的にこの説は否定されたが、現在でもそれを受け継ぐ人がいることや、その他様々な説が唱えられているという事実から、「進化」は奥深く、私達人間が解くには困難な問題なのだろうと思った。

次に、「生物の多様化」という課題では、生存競争での策略の違いが多様化の原因となっていたと書かれてあった。敵から逃れるために筋力が発達した生物、巨大化した生物など、生き残りをかけて進化し、結果として今、目の前に開ける自然や自分達人間が存在するのだと気付かされた。とても感動した。

なぜ本の題名を、著者は「生命とは何だろう?」という問いかけから始めたのだろうか。おそらく、この本を読む人全てに自分達が「人間」という生物の一員であることを意識してほしかったのかもしれない。ともかくも、それだけこの地球や宇宙は人にとって広く、強大で未知に溢れているのだろう。だからこそ、その不思議を知り、未知を追究できるおもしろさがある。人間も含め、生物がこんなに多くの偶然と出会って生きているのは、まさに奇跡だと思う。そして、そんな「生命」について探ろうとする生物、すなわち人間がいることも奇跡に他ならない。そう考えると今、困難にぶつかる時もあるけれど、家族や友人がいて、やりたいことを見つけられる自分は幸せだと感じた。だが、それは果たして全ての人間に通じるものなのだろうか。

「この世の中は自分のように幸福な人達ばかりではない。」私はこの言葉を思い出さずにはいられない。大きな問題の一つとして、世界ではまだ、戦争や紛争、飢餓などで苦しむ人々がいるという現実がある。そんな人達に対して、「生命」や「地球」の素晴らしさを語ったところで感動するだろうか。きっと、しないだろう。それどころか、「こんな目に遭うのなら、初めから人間なんていない方がましだ。」といったような返事をする人も、いるかもしれない。同じ人間同士にも関わらず、人を憎む人間だっていないとは限らない。さらに、私達の身近であるはずの自然がなくなってきている。これは、人による開発の結果だ。絶滅危惧種や外来種など、人が自然に対して行った行為はいずれ人自身にかえってくると学んだことがある。人は一種の生物としてあることをまず忘れてはならない。進化と共に知能が発達した人間は恐れる敵の存在が薄れたために欲が芽生え、思うがままに行動できたのかもしれない。それゆえに、人が人だけで生きているのではないと自覚しなければならない。人が全てを支配することは不可能である。自己中心ではいけない。人類が自滅へと向かわないために何をすべきか、今こそ考える時である。

どんな仕事も楽しくなる3つの物語

粉河高等学校　二年　大　西　美　穂

将来について一番深く考える時期が今、高校生の時です。仕事についての物語の本を皆さんにすすめます。まだ子どもの自分から働く大人の人たちを見ていると仕事は楽しいものなのか、必ずやらなければいけないのかと不思議な気持ちになります。

この本では著者が出会った三人の方が「仕事」と「人生」を輝かせるヒントを読者に教えてくれます。この本を読んで私が一番心に残った物語は第一章の「人であふれた駐車場」です。ある駐車場で管理人として働く定年したおじいさんの仕事に対する考え方が本当にすばらしいのです。駐車場の管理人という仕事は暑い季節や寒い季節、雨・風が強い時でも常に車を駐車するお客様のために駐車場のロープの外に立っています。とても大変な仕事で私なら魅力が感じられずやりたくないと思っているはずです。でもおじいさんはお客様のことばかり考えて、今やっている仕事を楽しみたいと毎日思っていたのです。仕事が面白いかどうかを、その仕事の内容にばかり期待すると裏切られてしまう事を学びました。

私の両親は新婚旅行にアメリカへ行きました。ホテルにはどの国もアルバイトやパートの方が部屋を綺麗に掃除してくれます。アメリカでは習慣・マナーとしてサービスを受けた際に、感謝の気持ちをお金で表すチップというものがあります。両親も宿泊した最後の日に部屋を掃除してくれた人にチップを渡しました。渡す量がよく分かっていなかったため持っていたほとんどの小銭を渡しました。

翌日、ベッドの横のテーブルに手紙に小さな花束まで添えられていたそうです。私はこのことを聞いたとき、ホテルで掃除をする仕事がとても良い仕事のように思えてきました。

ただお金を稼ぐためだけにこの仕事をしているなら手紙や花束まで置かないと思います。

お客様に喜びを与えることで感謝されると自分自身にも喜びが返ってくるという考え方をしているのだと気付きました。

なぜ皆仕事に就くのか、どんな価値があるのかと考える自分がいます。自分のやりたくて好きな仕事ならやる気が出ますが、夢が無いのに必死に就職活動をして仕事に就けたとしても続くのかと思います。けれども、この本を読んでから仕事の内容にとらわれず自分の仕事に対する考え方によって楽しさや価値が分かってくるものだと教えられました。これは仕事だけに関することではなく、勉強や部活動にも共通すると思います。私は小学四年生から高校までずっとソフトボール部に所属して日々練習に励んできました。何度もやめたいと思う時がありました。今その時を振り返ると先を見ていなかったのが原因だと思います。チームは決して強いとは言えず、試合でも勝てないことが多く、練習に嫌気がさしていました。自分のチームのことを強いチームだと思っていたら、勝つために一生懸命やろうとしていたかもしれません。

この本を読むと、たくさんの事に感謝したいと思えてきます。私たちは仕事をしているたくさんの方々のおかげで今のような幸せな暮らしを送れていることに気付きました。働くことは必ず誰かの役に立っているということ、感動を見つけることが出来るということ。つまり、人間は感動するために生まれてきたのだと思います。

オール1の落ちこぼれ、教師になる

粉河高等学校　二年　松　浦　弘　翔

私が読んだこの本の内容は、題名のとおり中学校の通知表は「オール1」の落ちこぼれの作者がどのようにして、教師になれたのかを紹介するというものです。私が題名を見るだけで、本気で本を読みたいと思ったのは、この本が初めてだと思います。内容にもとても感動しました。

その理由も内容と交えつつお話したいと思います。

作者の宮本延春さんは、いじめが原因で、学校を好きになれずにいました。そのため、勉強も手につかず、授業が分からなくても先生に質問するほどの度胸もなく、ますます分からなくなり、「勉強をして何になるのか。」と、思うようになりました。そのうち不登校を繰り返すようになりました。彼が中学を卒業したときの学力は、国語の漢字は自分の名前が書けるだけ、数字の九九は二の段までしか言えず、英語は「ｂｏｏｋ」しか書けないというひどい状態でした。こんな状態でどうやって教師になれたのか、まず、そこが気になりました。そして、その理由は、アインシュタインとの出会いにありました。彼はアインシュタインの相対性理論についての番組を見て、感動し、物理学に興味を持ち、本格的に学びたいという気持ちから、真剣に勉強をするようになったのです。そして定時制の高校で、国立大学の合格を目指し、必死に勉強し、本当に合格することができました。こうして、九年間大学生活を過ごし、その後、高校で人生の目標を見つける手助けをしたいと思い、教師の道を歩むことになりました。

自分はこうしたい、こうなりたい、という目標ができたから、真面目に勉強する事ができました。私自身、漫画家になりたいという夢はあります。しかし、漫画家になるために勉強するといっても、それは私の目標にはならないと思いました。数学や英語を学ぶことは、漫画家になるためには必要なのか、分からなかったからです。何を目標にして、今、高校で勉強するべきなのか。答えはこの本の中にありました。

「その夢を実現する過程には、必ず『学ぶ』という行為がどこかで必要になります。夢を現実に変える、その来るべき日のために、『学び方』を学ぶのが、私の考える『学ぶ意味』であり、勉強なのです。」

という文が目標を考える光となりました。数学も、英語も、教科から学ぶ基礎知識は、社会に出てからも役に立つし、将来のための準備運動なんだと改めて思いました。そして、自分の目標は、勉強して漫画家になるための専門学校の試験に合格することに決めました。基礎を学ぶ大切さを実感しました。このことに気付いた私は、感銘を受けました。

「大切なことは目標を持つこと、その目標に向かって努力すること。その努力がすなわち『学ぶ意味』なのです。」この文が心の中に残っています。これを読まなかったら、私は生きる意味に気づかないままでした。この本を読んで、私が学んだことは、努力すれば人は変われるということ。人の生きる意味は、夢や目標を持つこと。そして、人との出会いは大事ということ。あとは、どんなに苦しい生活をしていても、社会のどん底で生活をしていても、夢や希望を捨てなければ幸せになるチャンスはやってくることを学びました。この本自体が私にとっては先生のような存在です。また、宮本さんの生徒に対する思いには感動しました。オール１の経験があるからこそ、彼にしか教えられないことがたくさんあるんだなと思いました。ぜひ、皆さんにも読んでもらいたい一冊です。